

2021年9月26日(日)

老球の細道632号

爺と孫

会津バスケットボール協会 室井 富仁

総務省は敬老の日に合わせて2015年の国勢調査を基にして高齢者の人口推計を公表した。老球院居士の私を含む65歳以上の人口が前年より22万人増えて、なんと3640万人、総人口に占める割合(高齢化率)が29.1%となり過去最高となった。そして高齢者の就業率は25.1%となり、「4人に1人」に達したという。

たまに出稼ぎに出る私であるが、周囲を見渡すと私より上の世代の人達が日中仕事をしている姿を普通に見かける。また、私の自宅周辺では子どもより高齢者の活動が目につくこの頃である。他人事ではないが高齢化が急速に進んでいる。政府は「生涯現役で活躍できる社会を創る必要がある」として、高齢者に就労を促し、一方で、高齢者に新たな医療や介護の負担を求め、今後長生きが悠々自適とは逆行する社会になるのではないかと不安である。

私は、そんな先行き不安、高血圧、そして腰痛の「ビック3」を抱えながら、ほぼ「毎日が日曜日」という恵まれた環境の中で、午後は幼稚園から帰ってきた孫と虫捕り遊びが日課になっている。私の幼少の頃と違って、近所で昆虫や小川を泳ぐ魚を見つけるのは至難の業である。それでも、目を輝かせながら虫捕りをせがむ孫の情熱に負けて、百円ショップで購入した虫捕り網と虫籠を携えながら、獲物を求めて近所の田んぼ歩道に出かける。

先日雨の日に珍しく道路を横切るアメリカザリガニに遭遇した。掴もうとしたら立ち上がってファイティングポーズをとってきた。ザリガニでも身の危険を感じたのか闘争心丸出しで「やんのか!」とやる気満々だった。私も老爺心に火がついて格闘の末捕まえた。孫に見せたら「爺スゲー!」とほめられ、孫のために役立ったのかと自己満足と自信を得た。

また別な日には、シオカラトンボ捕りに励んだ。孫が自分で採ると自主性を発揮してチャレンジするのだが、素早く飛ぶシオカラには孫の状況判断と虫捕り網を操作するクイックネスでは通用しなかった。孫は捕れないことにいら立ち、しまいには泣き出してしまい、それだけでは悔しさがおさまらず鼻血まで出してしまった。4歳の子にも意地があった。

虫捕りのタイムアウトである。鼻血の治療をしながら孫を落ち着かせ、もう一度チャレンジさせた。シオカラにも油断があったのだろうか。何回も失敗しながら追いかけるうちにある時突然集中力の欠けたシオカラを捕まえることができた。しかも2匹もである。やっと捕まえることができた時の孫の満面の笑顔と2匹目を捕まえた時の自信に満ちた笑顔はバスケットボール選手のできないことができた、試合でアップセットを起こした時の表情と共通するものを感じた。

虫捕りもバスケットボールの指導も爺やコーチ等大人たちのミッションは同じである。できないこと、難しいことにチャレンジさせる。チャレンジさせたからには失敗を失敗で終わらせないで必ず成功させる。孫と虫捕りしながら改めてコーチングの原則を確認した。孫とお手手つないでの帰り道「子供叱るな来た道だもの、年寄り笑うな行く道だもの」。